

# ボランティアと私

何かを求めて

## ◇「やきもの」講師◇

陶芸研究会

「それではこのクラスではお皿をつくりましょう。説明を始めますよ」。11月15日、学生講師の呼びかけに、八王子市立第四小学校の教室内に「ハ〜イ」と小学3年生の明るい声が響いた。

### 学生講師7人が3組に分かれ 小学3年生と保護者に造形指導

学生講師は、中央大学陶芸研究会の有志7人。記者もそのうちの一人で、この日、小学3年生にボランティア講師として「やきもの」を教えるために、同校を訪れたのだ。学生講師は、玉づくりと、タタラ（板）づくりの計3組に分かれ、教室に向かった。

第四小学校では毎年この時期になると、合唱祭、学芸祭、作品祭の3つが年替わりで開催されている。「アートエキシビジョン」と呼ばれるこの催しは、在学中にそれぞれを2度ずつ体験できるシ

ステムだ。今年はそれぞれの学年で、保護者を交えた造形活動が企画された。

冒頭のよく通る声の学生講師は、法学部3年の中分舞さん。見慣れない「学生先生」に児童たちは興味津々である。中分さんが「『ふんふん』と呼んでくださいね!」というとき、「ゲンゲン?」「ちがうよ、ブンブンだって!」と対話が弾む。しばらくは児童たちの反応を探りながら、すすめていく。

続いて「こうた先生」(法学部2年 鈴木康太さん)、「なほ先生」(記者)が自己紹介し、お皿作りを手取り足取り教えてい



お皿作りの説明をする中分舞さん

「まずはデザインを決めますよ。何がいいかな?ではやってみましょう」のかけ声で、みんな一斉に紙に向かう。「ドーしよー」、「あつ、わたし決めた」、「だめだ。何にも思いつかない...」と表情を豊かに変える児童たちを前に、内心はドキドキしている学生講師たち。

きびきび動きながらも「緊張しますね」と微笑む余裕の「こうた先生」。でも、次の瞬間すぐに子供たちに袖を引っ張られる。「はいはい、これはね」と、だんだん打ち解けてきた。お父さん、お母さんたちも、めったにない「やきもの」の機会に夢中の様子で、黙々と作業を進めている。

## 企画をボランティア団体に登録 はじめは緊張、徐々に慣れて：

そもそもこの活動を企画、提案したのは、陶芸研究会の学陶委員の2人。文学部3年の大城さやさんと、商学部3年の青木央範さんだ。

「関東学生陶芸連盟という他大の陶芸サークルとの合同活動の中で、施設訪問なども視野に入れて企画してきたのがきっかけ」で、八王子市を拠点としたボランティア団体に登録しておいたところ、今回の話が持ち上がった、という。

「ぶんぶん先生」こと中分さんは、青木さんに声を掛けられ、この活動に参加した。「もともとボランティアに興味はありましたが、今までやったことはありませんでした」と中分さん。日常生活で、「小学生と直接触れ合う機会はない」ので、手探りの触れ合いが続く。

ふいに子供たちの中から誰かが、「ぶんぶんくんハチが飛ぶ」と歌い出す。あつという間にクラス全体の大合唱に広がった。「ぶんぶん先生」は子供たちに受け入れられたようだ。

## ボラ体験を通して、新たな学び 「面白かった。また来たいです」

工程が進むにつれ、それぞれが個性的な作品に



仕上がっていく。「いろんな子がいますね。自己主張が強い子に構っていると、おとなしい子を疎かにしてしまいがちなところが出てきてしまう・・・。全体を見るのがいちばん難しかったです」

と中分さん。

指導が終わって、学生講師は片付けにはいる。出来た作品を取り違えることのないように、ひとつひとつ確認をしていく。壁を隔てた向こう側では給食の準備に取りかかっているはずだが、教室の扉の影から、ひよつこりと顔を覗かせる子がいた。「楽しかったから、まだいるのかなっ、と思つて」と照れながら話してくれた。

## デザインをかく児童たち

自分の向上が人のためになり、ひいては、社会のためになる。またボランティア活動では新たな学びができる。学生講師のひとりとして参加した記者は、そう強く感じた。中分さんは、次のように感想を語ってくれた。

「小学校ということもあり、興味深いとか、懐かしいとか、教えるって大変とか。諸々込めて、面白かったです。実際に小学校に足を踏み入れてみたら、思ったよりも規模が大きくて楽しそうだと。教えるたいのもありますが、また来てみたいです」

(学生記者 竹下奈穂 経済学部4年)